

主論文の要約

論文題目 ひきこもりとエフォートフル・コントロールとの関連に関する研究

氏名 小橋 亮介

本論文の目的は、ひきこもりと関連する気質的な要因として、気質的な自己制御であるエフォートフル・コントロール（Effortful Control: 以下、EC とする）に着目し、ひきこもりと EC との関連について検討をすることで、ひきこもりの予防や早期の支援方法の提言を行うことである。

わが国ではひきこもりが大きな社会問題となっており、ひきこもりが高齢化・長期化しているという問題がある。さらに、ひきこもりは家にとどまって他者との関わりが減るといった特徴があるため、ひきこもり本人が支援に繋がりにくく、相談の開始までに長い時間がかかることも問題となっている。これらのひきこもりの問題、対応の難しさを考慮すると、ひきこもっているものへの支援だけではなく、ひきこもりの予防や早期の支援を模索することが必要である。ひきこもりの予防や早期の支援に繋げていくためには、ひきこもりの背景要因となり得る特徴に着目し、検討を行うことが1つの方法として挙げられる。

しかし、ひきこもりの背景要因は多様であり、先行研究では様々な要因とひきこもりの関連が検討されてきた。だが、海外で検討が行われてきたひきこもりの気質的な要因についての検討は、国内ではあまり検討がなされていない。その一方で、海外では国内におけるひきこもりで問題となっている青年期や成人期を対象とした検討が少ないことが指摘されている。このような現状に対して、青年期や成人期のひきこもりの気質的な要因についての検討を行うことができれば、ひきこもりの背景要因についての新たな知見を示すことができ、ひきこもりの予防や早期の支援方法を確立していくための示唆や提言に繋がる可能性がある。そこで、本論文では、ひきこもりの予防や早期の支援についての提言を行うことを目指し、ひきこもりと気質的な自己制御である EC との関連について検討を行った。

第1章では、わが国におけるひきこもりの現状について述べ、国内外におけるひきこもりに関する概念の整理と研究の動向をまとめた。それによって、国内においては、ひきこもりは主に6ヶ月以上家庭にとどまっている状態を指し、行動できる範囲や精神障害の有無などの違いによって異なる概念が存在していること、実際にひきこもっていないものに

もひきこもりに繋がる特徴が存在することが明らかになった。一方、海外においては、孤独や孤立している状態のことを広く指しているのがひきこもりということが示された。さらに、国内ではひきこもりの気質的要因に関する研究が少ないこと、海外では青年期や成人期のひきこもりに関する研究が少ないことが明らかになり、国内ではひきこもりの支援を重視するのに対し、海外では原因を追求することを重視していた。したがって、国内のひきこもりの予防や早期の支援を検討していくには、ひきこもりの背景要因や原因を検討してきた海外の知見を参考にすることが有効であると考えられた。これらを踏まえて、本論文ではひきこもりに関連する気質的な要因として EC に着目することを述べ、ひきこもりと EC の関連について論じた上で、本論文の目的と構成、各章の概要について述べた。

第 2 章では、ひきこもりと EC の関連について検討を行った。研究 1 では、一般の大学生を対象として、ひきこもり傾向を測定することで EC との関連について検討をした。青年期である大学生を対象とするにあたっては、成長の過程で青年期に獲得される社会的自己制御が関連していることが考えられたため、ひきこもり傾向と EC だけではなく、社会的自己制御を含めて関連を検討することを目的とした。514 名（男性 271 名、女性 243 名）の大学生に対して質問紙調査を実施した結果、ひきこもり傾向の下位尺度などで性差が示されたため、多母集団同時分析による男女別の共分散構造分析を行ったところ、EC が社会的自己制御を介してだけではなく、直接的にもひきこもり傾向に関連しており、特に EC の下位尺度である注意の制御がひきこもり傾向と関連していたこと、社会的自己制御の下位尺度である自己主張や感情・欲求抑制がひきこもり傾向と関連することが示された。この結果から、EC はひきこもり傾向およびひきこもりのリスクとなり得ること、ひきこもりのリスクがあったとしても、自己主張や感情・欲求抑制を高めことでひきこもり傾向の高まりやひきこもりに陥ることを予防できる可能性が示された。

第 3 章では、EC の下位尺度の中でも特に注意の制御がひきこもり傾向と関連しているという研究 1 の結果を受けて、EC がどのような注意を制御してひきこもり傾向に関連をしているのかを検討するため、注意バイアスという概念に注目をした。そして、研究 2 では、ひきこもり傾向と EC の関連に注意バイアスがどのような影響を与えているのかを検討することを目的とした。注意バイアスの測定には、ドット・プローブ課題を使用し、ポジティブ刺激と脅威刺激について、それぞれ Engagement score（その刺激への注目しやすさ）および Difficulty to disengage score（その刺激からの注意の解放の難しさ）を算出した。注意バイアスの影響を検討するために、調整媒介分析を研究 1 と同様に性別ごと（大学生の男

性 40 名，女性 60 名）に行った結果，EC およびポジティブ刺激に注目することによって，ひきこもり傾向を低減させることが示された。さらに，男性においてはひきこもり傾向と EC の関連を注意バイアスが調整していること，女性においては EC が注意バイアスを媒介してひきこもり傾向と関連していることが示された。そのため，注意バイアス修正を行うことによって，ポジティブな刺激に注目することができるようになれば，ひきこもり傾向の低減やひきこもりの予防に繋がる可能性が示唆された。

第 4 章では，ひきこもり経験者を対象として，ひきこもり経験プロセスおよび，研究 1, 2 で考慮されていなかった環境要因として周囲の関わりをインタビュー調査し，それらに EC による違いがあるのかを検討した。研究 3 では，ひきこもり経験者 9 名にひきこもり経験プロセスおよび周囲の関わりを尋ね，EC の高低によって異なる部分があるのかを検討することを目的とした。SCQRM をメタ研究法とした M-GTA による分析を行った結果，思春期の難しさや家族との関わりのお少なさ，学校での傷つき体験がひきこもりと関連していることが示された。そして，ひきこもりに陥ってからは，家族が受け入れてくれる環境や同じような経験をしたものの存在が重要であることが示唆された。EC の高低による違いについては，EC が高く，ひきこもりのリスクが少ないと考えられるものは，家族機能不全やいじめを受けるといったストレスの多い環境であったことがわかった。また，EC が低いものはひきこもりを抜けた後に再度ひきこもりに陥りやすいことが示された。こうした EC の高低による違いが見られたことから，ひきこもりには，生まれ持った個人の脆弱性に対人関係によるストレスなどの環境が影響して，ひきこもりや内的な問題を呈するというストレス脆弱性モデルの枠組みによる理解が有用であること，EC のような気質の違いによってひきこもりのプロセスや有効な支援が異なることが示唆された。

第 5 章では，上記の研究知見をまとめ，得られた知見からひきこもりの予防や早期の支援についての提言を行った。本論文には，着眼点に差異があったわが国と海外のひきこもり研究に対して，それぞれの知見を踏まえてひきこもりについての検討を行った点で学術的な意義がある。また，本論文によって示された EC が低いもののように，ひきこもりに陥るリスクが高いものの存在を示唆したことによって，そのようなものに対する支援の必要性を示したこと，ひきこもりに陥るリスクがあったとしても，ソーシャル・スキル・トレーニングや注意バイアス修正などの支援を行うことで，ひきこもりに陥るリスクを低減できる可能性を示したことが，本論文の実践における意義として挙げられる。最後に，本論文の限界と今後の課題について考察を行った。今後は，ひきこもり本人やひきこもり経験者

を対象としたさらなる検討を行うこと、EC以外のひきこもりと関連する生物学的・気質的要因を検討するなど、ひきこもりの背景要因に関するより詳細な検討が必要であること、本論文で提言されたひきこもりの予防や早期支援の方法は実際に効果があるのかを検証していくことが必要であると考えられた。